

LD (学習障害) 児への援助システムに関する考察 (上)

—米国における治療機関の現状を通して—

清 原 浩

(1992年10月15日 受理)

An essay on an aid system for learning disability children in USA (A)

Hiroshi KIYOHARA

目 次

はじめに

1. エアーズ・クリニック (カリフォルニア) での取り組み
 2. CNS (アリゾナ) での取り組み
 3. コロラド州の学習障害児教育システム
 - 1) ハイヴァーン・センター
 - 2) チェリー・クリーク校
 (ここまでが上, 以下は次号へ)
 - 3) キッズ財団の取り組み
 - 4) コロラド州の障害児教育政策
 4. 個人開業作業療法士の取り組み (カリフォルニア)
 5. 考察
- おわりに

は じ め に

1991年1月3日から14日までの短い期間であったが、日本感覚統合障害研究会の主催による視察旅行に参加する機会を得た。視察した治療機関ないし学校を以下にほぼ紹介することになるが、視察を企画立案し、案内も務めてくれたのが山田孝・秋田大学医療技術短期大学教授 (同研究会事務局長)、小西紀一・京都大学医療技術短期大学助教授 (同研究会国際部長) であった。きわめて有意義な視察であったので、そこで得た知見をまとめることは意義の大きいことと考え、考察も加え

て (次号になるが), 公表するものである。

1. エアーズ・クリニックでの取り組み¹⁾

エアーズ・クリニック THE AYRES CLINIC はカリフォルニア州ロスアンジェルス市の近く、トーランス市 Torrance にある。感覚統合療法による学習障害児へのアプローチを試みている世界的に有名な治療機関である。1976年に感覚統合療法を提唱した作業療法士・臨床心理士である故・エアーズ博士 A. J. Ayres によって、その理論を実践する場として開設された。エアーズは南カリフォルニア大学の作業療法学科や特殊教育学科の助教授でもあった関係から、クリニックは現在でも同大学の学生や他の教育機関の学生の実習機関として利用されている。

さて、次にクリニックの概要について述べるが、その前に、エアーズ・クリニック自体が学習障害をどうとらえ、親たちにどのような取り組みを勧めているか、同クリニックの親向けのリーフレット²⁾ から見てみよう。

まず感覚統合について述べる。人間に触覚や前庭感覚 the vestibular sense (重力方向や頭の運動を感知する感覚) が働かなかったとしたら、自分の位置さえつかむことができない。人間の根本的な状況判断にはそうした感覚の相互作用が必要不可欠であり、各感覚の組織化を感覚統合と呼ぶとしている。そして、感覚統合過程に障害をもつとき、ものごとを学習していく根底に障害を受けるという意味で学習障害というとしている。感覚統合の障害の兆候は①触覚、運動、視覚、聴覚の過剰な敏感性、②あるいは逆に感覚刺激への低反応、③手足や手と目などの協応性の問題、④言葉・運動スキル・学習の遅れ、⑤運動の企画化が下手、さらには⑥自己概念が不十分といった状態像に示されているとされる。その治療については、症状一つ一つへの矯正的な訓練ではなく、大脳内の感覚統合過程を促進するような遊び (その内容が作業療法的観点から構成されている。本論ではシステムを中心に論じているので、その遊びの内容は論及しない) を行うものなので、むしろ子どもの自発性が大事にされている。

以上のような障害を持っている子どもたちに対して、エアーズ・クリニックは次のようなシステムで対応している。

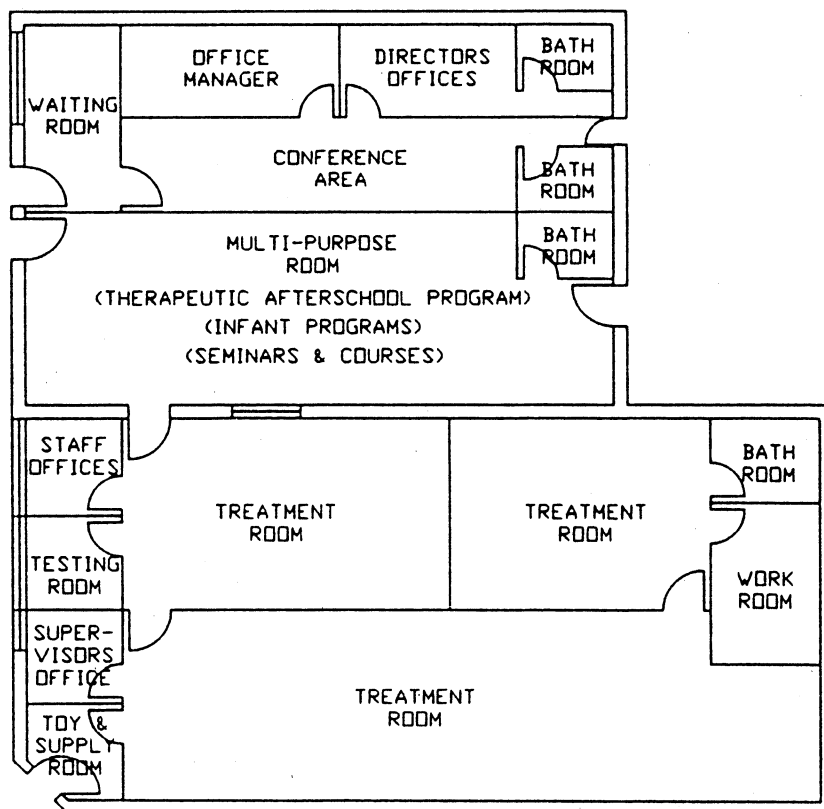
〈クリニックの性格と目的〉クリニックは学習障害児に特徴的な症状とされている、次のような問題 problems に焦点を当て、厳密に作業療法としてのアプローチを行っている。

- 1) 接触 touch されたり、動かされたり movement することへの過敏な反応 over-sensitivity
- 2) 感覚活動 sensory experiences への反応の欠如
- 3) 異常に高い、あるいは低い活動性
- 4) 下手な協応動作 motor coordination
- 5) 言葉、動作 motor skill, 学業の遅れ
- 6) 以上のことから生じる低い自己評価

〈クリニックのシステム〉以上のような問題に対して、クリニックでは子どものニーズに基づき次のようなシステムを構築して対応している。

- 1) 評価 Assessment —まず、子どもがどんな作業療法的活動に参加することが効果的か、の判断材料を親に提供するために子どもの問題状況の評価を行う。
- 2) 個別治療—週2～3回の個別セッション。そこでは、特別な動作訓練などに向けられた治療 treatment, 家庭訪問、さらにはグループ・プレイ、両親プログラム、その他のグループ活動なども用意されている。

図1 エアーズ・クリニックの内部構造



Besty A. Slavic, Terri Chew; The Design of a Sensory Integration Treatment Facility: The Ayres clinic as a Model, Enviroment: Implications for Occupational Therapy Practice, 1989

3) 3つのグループ・プログラム

“Club Ked と Pure Fun” という名前のグループが設定されており、就学後の5～10才の子どものためのもので、動作スキル、スポーツへの適応、社会性の形成 socializing with peers, 指示への適応行動などに援助を必要としている子どものために開かれている。活動内容はスポーツ、微細・粗大運動、目と手の協応ゲーム、音楽と運動、創造的思考を要する遊び、相互関係を持つ遊び interactive play, そして社会性の習得などである。

“Movement Is Fun” という名前のグループは3～5才の子どもたちのためのもので、通常の発達を強化するプログラムが内容になっている。

“Milestones” というグループは幼児のための治療的なプログラムで、感覚、動作、認知、

言葉、社会性などに遅滞やその恐れのある子どものためのものである。

- 4) 施設の概略 (図1) —エアーズ・クリニックの建物は、大きくは事務室と治療室に別れ、治療室は3室あり、治療室には感覚統合を促進することに効果がある遊具類が整然と十分に配置されており、子どもたちはそれらの遊具を使いながら、作業療法士の資格を持つセラピストとともに自発的に遊ぶことになっている。
- 5) 両親とのかかわり—エアーズ・クリニックは家族との緊密な意志疎通を重視しており、それによってさまざまなプログラムも発展するとしている。したがって、セラピー場面の見学は歓迎されるし、家庭で行えるような子どもの活動のアイデアも提供している。もちろん、個別的な相談も重要で有効的なものと位置づけている。
- 6) その他のサービス活動—エアーズ・クリニックはさまざまな専門家と資料を交換したり、I E Pの会議 (Individual education plan meeting 障害児の個別的な教育プログラムを親や教師の合議のもとに決定していく会議) に出席し、専門家・親・地域の団体に情報を提供している。

〈治療費〉エアーズ・クリニックは非営利的事業と位置づけられているので、免税であり、治療費は他の治療機関に比べて安い。また、親の収入に応じて金額も勘案されている。また奨励金制度もある。カリフォルニア地域センター、公教育システム、さらには多くの保険から基金をもらうこともできる。

特徴としてまとめてみると

- 1) 南カリフォルニア大学の作業療法学科と連携して学術的水準を持ったクリニックということ
- 2) 作業療法という視点に絞った感覚統合療法を追及していること
- 3) 世界的な交流のセンターとなっていること

などである。

2. CNS (アリゾナ) での取り組み^{3) 4)}

CNS (CENTER FOR NEURODEVELOPMENTAL STUDIES, 神経発達研究センター) はアリゾナ州の州都フェニックス市の郊外の閑静な住宅街にある。同一敷地内に小学校と老人福祉施設が並立しており、それぞれと交流を持つという日本では見られない光景を呈している。日本流に解釈すれば、小学校の中に小規模な養護学校と小規模の老人リハビリ・センターが同居しているといった感じである。研究センターという名称を使っているが、センターの実践内容はまさに養護学校にて、親しみを覚えるものであった。しかし、その活動内容は、後に見るように多方面に渡っている。

さて、このセンターも感覚統合療法の考え方を導入、検証しながら、学習障害児のみならず、かなり重度の発達障害を持つ子供達の治療も試みている。CNSによれば、「最新の科学的知見はセラピストや教師に、子どもたちが潜在的な能力を発揮できるように新しい手段を提供している」。とくに、「神経学的な障害が多くの子どもたちにある学習や行動の問題の背景に存在している」という現状をふまえて、CNSはつぎのような4つの目標を掲げている。

- 1) フェニックス地区に最も質の高い治療的なサービスを提供すること。そのサービスの方法や技術は最新の神経学的な知識に基づいていること。
- 2) 新しい方法や技術を検証したり、開発するための研究を行うこと。
- 3) 大学院レベルの教育プログラムの開発、専門的な研修教育の実施、セミナー、ワークショップの実施、相談サービスの実施、雑誌やテキスト、季刊ニュース「Neurodevelopments 神経発達」の出版などを通じて得られた科学的な進歩に関する情報の全米的、世界的な普及。
- 4) 発達の問題に神経学的な問題が存在していることを一般の人々にも伝えていくこと。

次にCNSのシステムについて言及しよう。

〈**評価 Evaluation**〉 評価 Assessment は神経発達学的問題を確認する第一のステップである。有資格の専門家が知的能力とニーズを決定するためさまざまなテストや臨床的な観察を用いる。得られた知見や助言はレポートとしてまとめられ、両親と協議される。

〈**発達援助のデー・スクール**〉 自閉症児の教育のための1年単位のプログラムで、アリゾナ州立大学教育学部の認定を受けている。幼稚園から高校までの子どもたちがいくつかの学区から通学し、4つのクラスに別れ、それぞれ5ないし8人ずつになり、治療と教育を受ける。職員対生徒の比率は高い。セラピストと先生は試みが成功するように組み立てられた環境のもとで一緒に働いている。集中的なセラピーが次のことを強化するために行われている。すなわち、感覚過程、認知、問題解決、コミュニケーションの領域である。それらは社会的、情緒的、知的、職業的スキルのための基礎となる。地域での活動は学習したことの応用と一般化をする機会を与える。

〈**個別セラピー**〉 作業療法や言語治療、音楽療法、理学療法の個別セッションは両親の都合のいい時に行うことができる。

〈**Good Beginning**〉 直訳すれば「よき出発」と呼ばれるクラスは、2才から6才までの子どもたちのためのもので、午前、午後のセッションを持っている。このプログラムは注意欠陥障害、不器用、情緒障害、言語障害、自閉症、発達遅滞、あるいは特殊な感覚運動障害を持つ子どもたちのためのものである。スタッフは幼児教育教師、作業療法士、言語治療士、音楽療法士、助手、インターン、理学療法・コンサルタントなどである。子どもに提供する活動は感覚、運動、社会的、教育的発

達を促進するようにデザインされた遊び中心の楽しいものである。

〈Discovery〉直訳すれば「発見」と名づけられたクラスは6才から12才の子どものグループ・セラピーのために用意されたもので、放課後に行われる。治療的な活動は感覚統合、社会性の発達、基本的な概念の発達を促進するように計画されている。セラピストやインターン、助手は活動の模範を示し、個別的に子どもへの注意を払う。音楽療法はさまざまな治療的目標を補足するための不可欠な要素として重視されている。

〈両親用のプログラム〉夜間セミナーが両親や介助者のために開かれ、コミュニケーション、サイン言語、感覚統合、食事指導、栄養、家庭でのセラピー・プログラム、動作指導 behavior management などの特別な課題について学習する。子ども同伴のときは子どもの保育も行っている。

〈経済的援助〉親の支払能力に関係なく子どもに基本的なサービスを続けるために、一般市民の支援を期待している。CNSは私立で、非営利事業体であり、財政的支援の必要性は大きい。運営費は主として州や連邦の補助金、学区との契約金、個人的な保険からの支払、授業料、設立補助金、そして寄付金からなっている。運営費の大部分は最高25名の奉仕的なスタッフの給与に使われている。

費用がかかるが、サービスを必要とする人は誰もそれが障害にはなっていない、とCNSは考えている。そのために、CNSはスライド制の授業形態を取っているし奨励金の金額を高めるように努力している。

〈施設の概略〉小学校の校舎を転用しているらしく、職員室とそれに横一線に続く、教室、プレールームなど5つばかりの部屋からなっている。各部屋とも外部からの光を調節して、暗めにしてある。子どもたちが落ち着いて活動できるという理由である。

〈その他〉CNSはセラピーを必要としている少数の子どもたちに直接的なサービスを提供している。その効果を高めるために、いくつかのその他のプログラムを開発している。

就学前・プロジェクト：早期からの治療は、放置したままでは傷つくことの多い子どもの自尊心を保持するために重要である。CNSは就学前の教育専門家にテスト、ミラー評価法などを使って早期にリスクのある子や障害のある子を明確にする方法を教えている。さらに依頼に応じて、セラピー、両親用の家庭でのプログラム、先生からの相談受理も行っている。セラピーはモンテッソーリの就学前プログラムを利用している。

〈**専門実習**〉作業療法と音楽療法の学生、院生の実習も引き受けている。さらに心理学、看護学、教育学の学生の实習も含まれている。

〈**卒後教育**〉治療、評価、講義、研究を通して学ぶ機会を専門家にも用意されている。これらの実習は3カ月単位で提供されている。

〈**ワークショップ・セミナー・コンサルテーション**〉CNSのスタッフはさまざまな親グループ、専門家のための教育機会の継続を用意している。州レベル、全国レベルの公的機関や学校の相談を受けている。シンポジウムは毎年著名な専門家を招いている。

〈**国際的な事業**〉CNSは日本感覚統合障害研究会と姉妹関係を持っており、同研究会は年に2回セラピストや教師を派遣してきている。名誉所長キングはオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、スカンジナビア、日本に講演者として招かれている。世界から訪問者がしばしばCNSを見学している。

以上が概略であるが、CNSの特徴は

- 1) 学習障害児に対してだけでなく、さまざまな障害児に感覚統合療法を試みていること
- 2) また、スタッフも作業療法士だけでなく、言語治療士、音楽療法士、教師、ボランティア的な介助員とさまざまな職種の専門家が力を合わせて治療に取り組んでいること
- 3) 地域の専門家とだけでなく、世界的な交流を持っていること

などにまとめられよう。

3. コロラド州の学習障害児教育システム

1) ハイヴァーン・センター^{5) 6)}

コロラド州のリトルトン市にあるハイヴァーン・センター HAVERN CENTER は基本的な学習能力は完全であるのに、神経学的障害のために学習に困難を持っている子どものためのセンターである。現在の文献や法律では教育障害とか知覚的あるいは言語的障害に関連した学習障害とされている子どもたちのためのもので、センターという名称であるが日本で言えば学校そのものである。しかも、学習障害児のみを受け入れているという状況からすれば養護学校とも言えなくないが、障害が軽いので、全く一般の学校と見分けがつかない。

センターは人種、皮膚の色、国籍の区別なく子どもたちを受け入れている。現在、多くは州都のデンバーや近くの地域から来ている。センターは子どもたちに発達し、障害に打ち勝ち、自分たちの完全な可能性を理解し、出来るかぎり早く通常の学校へ復帰できる機会を提供している。

センターは数少ないタイプの学校の一つである。しかし、すべての子どもたちの少なくとも6パーセント、多くは20パーセントの子どもがこのセンターでうまく直す可能性を持つ問題を抱えていると考えられている。

〈入っている子どもたちの姿〉

センターの子どもたちは学習障害と診断されている点では大変特別である。知能的には90から150に広がっているが、「バカだ」と他の子どもたちからいじめられていた。というのも数学的な概念を理解できなかったし、字を読むことも出来なかったからだ。センターの多くの子どもたちが2年ないし3年、なかには6カ月で通常の学級に戻ることができている。1966年に設立されて以来、多くの子どもを首尾よく彼等の本来の学校に戻すことができた。追跡調査によれば、ほとんどの子どもが通常またはよりよい仕事にその能力に応じてついていることが明らかになった。少数の子どもが、いまだに問題を抱えてはいるが、このセンターに入ったことが役に立っていると感じていることが明らかになっている。

センターに入ってくる子どもたちに見られる障害の範囲は協応動作のなさ、視覚・聴覚の問題、多動、そして強度の注意散漫などである。耐性の低い欲求不満、衝動性、動機の欠如などは典型的に見られる。こうしたことが失敗感に基づく自尊心に影響を与えている。

まだ、学習障害の真の原因を正確には確認できていないが、この障害は女より男の子に優勢であり、時には家族的である *run in families* ように見える。障害は出生以前のものであったり、出生時の障害であったり、事故とか病気による初期の脳の障害だったりすることが、センターに入ってきた子どもたちの実態から言えそうである。

センターの子どもたちは5才から12才である。問題の程度は様々なので、個別的な教育、セラピーが個々の子どもたちのために用意されている。ささいなことであれ成功体験は子どもの自己像を復元するために大変重要である。したがって、センターでの活動は失敗が最小限であるように準備され助けが用意されている。成功はクラスでの成績の順位ではなく、彼自身の進歩と到達によって評価されている。ここの子どもの大部分は The Children's Hospital かコロラド大学の保健科学センターの診断を経ている。

〈教職員〉

1966年にセンターを開設した教師たちはクリュックシャンクの指導を受けている。彼は学習障害研究の開拓者でシュラキューズ大学に属していたので、その大学の出身者が多かったが、センターが大きくなるにつれて、教師たちは地域(コロラド州)の大学から来るようになった。センターに就職するには特殊教育の修士号を必要とするような高度の資格水準が数年間続いている。各教師はフルタイムで働く助手とペアーで仕事をしており、助手の多くは教育学士かセンターで訓練されている者たちである。作業療法士と言語治療士が必要なセラピーのプログラムを作成す

